様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年　５月２３日現在

機関番号：１４４０１
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2010～2011
課題番号：22820037
研究課題名（和文）　近世成立の南朝関係の史書に関する文献学的・史料論的研究

研究課題名（英文）　A historiographical, philological study on history books about “Nancho” dynasty relationship in early modern ages.

研究代表者
勢田　道生（SETA MICHIO）
大阪大学・文学研究科・助教
研究者番号：40580668

研究成果の概要（和文）：近世成立の南朝関係の史書について、伝本調査を踏まえ、その特徴や影響関係、またこれをめぐる人的交流について検討した。具体的には、『北畠准后伝』と神戸能房編『伊勢記』との関係について検討し、『北畠准后伝』も能房の作であり、その内容は作者能房のアイデンティティ意識を強く反映していることを明らかにした。また、『南朝編年記略』・『南朝皇胤紹運録』の著者・津久井尚重をめぐる人物関係について検討し、尚重の学問の基盤には京都の有職学があったことを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：I investigated history books on Nancho dynasty written in early modern ages by considering based on manuscript research, doing significant feature research, influence relations included human relations of those books. To be specified, I examined a correlation between “Kitabatake Jugoden” and “Iseki” of the author Kambe Yoshifusa, it revealed that “Kitabatake Jugoden” was written by Kambe, and the content of the book reflected his own identity. Moreover, I investigated human relations of Tsukui Naoshige, the author of “Nancho Hennenkiryaku” and “Nancho Koin Jounroku”, revealed that Kyoto ritual study was apparent in the basis study of Naoshige.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２０１０年度	1,140,000	342,000	1,482,000
２０１１年度	930,000	279,000	1,209,000
年度			
年度			
年度			
総　計	2,070,000	621,000	2,691,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：日本文学
キーワード：中世・近世国文学、南朝、史書、文献学、歴史学

１．研究開始当初の背景

南北朝の南朝とは、日本史上に類例を見ない特異な存在であり、それゆえに、南朝というテーマは、近世以後、昭和戦前戦中期に至るまで、知識人の関心を集め続け、日本人の精神性に影響を与え続けた。その影響は、史学や思想のみならず、文学や民俗学の分野にも及んでおり、また、都市だけでなく、地方においても独自の展開を見せている。

しかし、南朝史受容についての従来の研究の枠組みは、山崎闇斎学派や水戸学派といった思想的上部構造に偏しているため、近世における多様な南朝史受容の問題を捉えるには不十分であるといえる。より広く、基礎的

で共益性の高い観点から、近世の南朝史享受を支えた下部構造を分析する必要があった。

２．研究の目的

上記の問題意識により、本研究は近世の多様な南朝史享受を総合的に把握することを目的として、以下の二点を研究の柱として立てた。

(1)近世の多様な南朝史享受の基底にあったと考えられる南朝関係の史書について、文献学的観点から、伝本調査によって良質な伝本を選定し、さらに、作者・依拠資料・影響関係などの基礎的事実を解明することにより、近世の南朝史享受における上記文献の文献学的な位置を明らかにする。

(2)上記の検討を通じ、史料論的観点から、上記対象文献を知的資源として捉え、これをめぐる近世知識人の活動の様相を追究し、これにより、近世における知的資源の生成・流通の構造を明らかにする。

なお、上記(1)は、近世に多く作成され、広く受容された雑史・軍書の基礎的研究のケーススタディとしての意義を持つものであり、また、(2)は、南朝関係の史書の流通構造に関係した人物の思想や著作、また伝記的事実の研究にも寄与するものである。

３．研究の方法

本研究の目的を達成するための基本的方法は、現存する諸本を調査することにより、良質の伝本を見いだし、これに基づき、それぞれの史書の特徴や影響関係、また、その背後にある人物や書物のネットワークを解明することにある。

本研究では、特に、近世中期に流布が始まる南朝の官員録・『南朝公卿補任』と、これと密接に関わる柳原紀光『続史愚抄』や津久井尚重『南朝編年記略』・『南朝皇胤紹運録』の伝本を調査し、内容と影響関係について精査するとともに、上記諸書の奥書、蔵書印、さらには関連する書翰・随筆などを調査し、これらから窺える知的資源の流通と人的交流の様相を明らかにする。

４．研究成果

本研究の成果として、論文および口頭発表で公開したもの、および、本研究に伴って新たに発生した課題の概要は、以下の通りである。

(1)『南朝公卿補任』と密接な関係をもつ津久井尚重『南朝編年記略』・『南朝皇胤紹運録』の伝本を調査するとともに、その内容的特徴として、自家の記録や、地域の伝承・金石文を利用していることを指摘し、両書には編者尚重の、自身の先祖に対する意識や地域の歴史資源への関心が反映していることを指摘した。

ただし、『南朝編年記略』・『南朝皇胤紹運録』の伝本については、国文学研究資料館ホームページ掲載の「日本古典籍総合目録」所掲の伝本の多くを閲覧することができたが、誤脱の少ない優良な伝本は、未だ見いだすに至っていない。また、『南朝編年記略』には、増補本と思われる作者名を欠く伝本があり（国立国会図書館蔵本、東京大学史料編纂所蔵本など)、これらは水戸藩における『大日本史』編纂とも関わるものと思われるが、これについても論じることが出来なかった。よって、より精緻な研究を行うためには、さらに伝本について詳細な調査・検討が必要である。

(2)『南朝編年記略』の作者・津久井尚重をめぐる人的交流について調査し、尚重が京都に在住し、木村兼葭堂や高山彦九郎と交流を持つとともに、速水房常や多田義俊、高橋宗直など近世中期の京都の高名な有職学者のもとで学習し、有職学に関する文献の書写・校合や注釈を行っていたことを指摘し、また、尚重の南朝史研究の成果は、水戸彰考館総裁の立原翠軒や、江戸和学講談所の塙保己一にも注目され、受容されていたことを明らかにした。これにより、尚重の業績の根底には京都の有職学の枠組みがあると考えられることを指摘するとともに、尚重という人物を近世学芸史上に位置づけるための見取り図を示した。

なお、上記の検討に関連して調査を行った名古屋市蓬左文庫蔵堀田文庫本『講席余話并抄出』所収学統図は、近世初～前期から、この資料の成立した寛政５年にいたる、近世の国学・和学・神道学・有職学など諸学芸に関する多くの重要人物について、学統を掲載している。それらがすべて史実であるとはいえないが、単に津久井尚重のみならず、近世学芸を総合的に把握するために、貴重な情報であり、特に、近世初期の和学・神道思想から近世後期の国学に至る流れを把握するためにも重要である。よって、同資料を翻刻し、論文に掲載した。

ただし、尚重の学問の根底にあった京都の有職学者の具体的な活動とその学問的特徴については、膨大な資料が残存していることもあり、従来、十分に明らかにされていないため、尚重の学問の実態についても、有職学との関連で捉えることは、現時点では困難である。そのため、近世中期の有職家の活動について、より具体的な研究が必要となった。よって、これについては、2012 年度より科研費（若手(B)）の交付を受け、さらに検討を

継続している。

(3)『南朝公卿補任』や『南朝編年記略』・『南朝皇胤紹運録』、さらに『続史愚抄』とも密接な関係を持ち、北畠親房の伝記としても注目すべき内容を持つ『北畠准后伝』について、紀州の浪人学者である神戸能房が著した鎌倉後期～織豊期の史書・『伊勢記』との関係を検討し、『北畠准后伝』も神戸能房の作であり、その内容には、作者である神戸能房の、北畠家の血と学問に対するアイデンティティ意識が強く反映していることを明らかにした。

ただし、『北畠准后伝』が成立した後、どのように伝来し、受容されていったのか、については、管見に触れた神戸能房の著述の奥書によって数点の指摘を行うにとどまり、具体的な著述内容が後代にどのように影響したのかという問題については、検討に及ぶ余裕がなかった。また、『北畠准后伝』と類似した内容をもつ『続史愚抄』への影響についても検討を試みたが、『続史愚抄』には数次の稿本があり、そのうち初稿本（西尾市岩瀬文庫蔵）の詳細な調査をする機会を得たが、同書には『北畠准后伝』と類似する記事を含め、南朝に関する記事はごくごく少ないことが判明した。よって、『北畠准后伝』の影響については、『続史愚抄』の内容や改稿過程についての詳細な検討を踏まえ、さらに精細な検討を行う必要が生じた。

(4) 津久井尚重『南朝編年記略』・『南朝皇胤紹運録』の内容的特徴を明らかにするため、同書の依拠資料について検討した。特に注目したのは、『大日本史』の利用についてである。同書の序には、『大日本史』を参照したことが述べられている。『大日本史』は近世最大の史書であるが、幕末期に刊行されるまでは、一般には容易には見ることが出来ない文献であったと考えられている。よって、『南朝編年記略』における『大日本史』利用の問題について、『南朝編年記略』の問題として、また『大日本史』流通の問題として、研究を行った。

近世中期の『大日本史』の伝本については、「正徳本」と「享保進献本」の二種の存在が明らかにされているため、実際に『大日本史』の伝本数種を調査し、また『大日本史』の流布に関する記録や随筆などを調査した。その結果、近世中期には、懐徳堂本に代表される「正徳本」が少なくとも一定の範囲内で流通していることが判明した。また、『南朝編年記略』と『大日本史』との本文を比較することにより、『南朝編年記略』に引用されている『大日本史』も、「享保進献本」系統ではなく、「正徳本」であるという見通しを示すことが出来た。

ただし、『大日本史』の「正徳本」「享保進献本」、またそれ以後の改稿の問題、さらにこれらの伝本の流布の実態については、従来ほとんど検討されておらず、本研究における成果としても、『大日本史』自体の分量が膨大であることもあり、全丁にわたる調査を行うことができた伝本は、わずか３本にとどまっている。そのため、『大日本史』伝本の流布の全体像については、いまだ糸口を得るに留まっており、さらに多くの伝本を調査し、内容を詳細に検討する必要がある。この点についても、現在、さらに調査・研究を進めている。

なお、本研究は、研究対象とする文献の諸伝本に残る奥書や蔵書印などにより、伝来情報を収集し、これらの文献の流通過程を明らかにすることをも目睹していたが、実際に伝本調査を行ったところ、奥書を持つ伝本はごく少なく、また、蔵書印についても、書承関係・影響関係を立体的に捉えることができるほどには存在しないため、この点については、別の方法によって研究を行う必要がある。ただし、『南朝編年記略』については、本文の書式から見て、現在第一冊を欠落する昌平坂学問所本が、流布本の祖本に近いのではないかという手応えを得ている。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）

① 勢田道生、『北畠准后伝』と神戸能房編『伊勢記』、語文、査読有、97 輯、(2011)、13-27

② 勢田道生、津久井尚重の研学と交流―附・名古屋市蓬左文庫蔵『講席余話并抄出』所収学統図翻刻―、詞林、査読無、50 号、(2011)、60-72

〔学会発表〕（計２件）

① 勢田道生、津久井尚重『南朝編年記略』における『大日本史』利用の前提、大阪大学古代中世文学研究会、2012.3. 17、大阪大学

② 勢田道生、津久井尚重の研学と交流―近世後期における南朝史享受の一様相―、大阪大学古代中世文学研究会、2011.3. 26、大阪大学

６．研究組織
(1)研究代表者
勢田　道生（SETA MICHIO）
大阪大学・文学研究科・助教

研究者番号：40580668

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし